発表タイトル	沖縄県におけるカツオ漁の変化：本部町を事例に
発表者所属名	比較文化学専攻・国立民族学博物館
発表者氏名	吉 村 健 司

発 表 内 容

【研究背景】

＜2010 年-2011 年におけるカツオ漁＞

- 気仙沼宣言の採択（カツオ産業の維持発展を目指す）
- カツオ学会の設立（カツオ漁の振興を目指す）

カツオ漁の衰退が背景

⇒ ・近年まれに見る業界の動き　・沖縄県においても様々な動きが見られる

＜沖縄における近年の動き＞

2004 年：本部かつお漁業振興対策協議会の発足
2007 年：池間島におけるカツオ漁の終了
2010 年：本部町の船団の解散
　　与那国島において再産業化
2011 年：本部町において新船団の発足

【本研究の目的】

カツオ漁にとって大きな変化の年となった 2010-11 年。特に沖縄県・本部町のカツオ漁を事例に 2010 年から 2011 年にかけての船団の動きを明示する。そして、本部町のカツオ漁の今後の可能性について考察する。

＜本部町におけるカツオ漁とは＞

- 2009 年時点で町内漁業者（75 名）のうち 40%を占める
- 本部町の中心的漁業：全漁業水揚げ額の約 3 割を占める
- 餌採捕・カツオ釣獲の同一船団操業

旧船団と新船団の比較

	旧船団	新船団
漁船規模	48 トン	19 トン
船員数	30 名	5 名
船員のカツオ漁経験の有無	有	有（責任者のみ）
餌の確保	自船団	自船団
餌魚の漁法形態	集魚灯	集魚灯
カツオの漁法	一本釣	一本釣
操業スタイル	日帰り	日帰り

＜旧船団と新船団の比較＞

- 漁船規模の縮小化：免許取得が容易。ほとんどの漁民が取得済。旧船団の漁船規模では免許取得が困難。
- 船員数の少数化：一人当たりの収入増。
- カツオ漁未経験者の増加：操業効率が劣る。育成しながらの操業。
- 漁法・操業スタイルの踏襲：一本釣・日帰り操業、自船団での餌確保という形式が本部町の伝統的な形式とされ、それが維持、継承されることになる。

＜本部町のカツオ漁の今後＞

- 新船団のシステムの確立：現在は試験操業状態であり、船団システムの確立が急務
- カツオのブランド化の必要性：日帰り操業という強みを生かしたブランド化・カツオの高付加価値化⇒若年層の参入促進
- 新規参入の促進：カツオ漁の維持を図るため伝統に拘らない新規参入の促進の必要性